

vol. **01** 農場を
デザインする
ということ

永井進の
農場スタイル
ノート

Nagai Farm Business Style Note

永井 進

Nagai Susumu

1971年、長野県生まれ。
（有）永井農場専務取締役。長野
県東御市で酪農と稲作の複合
経営に取り組みながら、従来
の大規模化とは異なる農場発
展の可能性を模索している。
<http://www.nagaifarm.co.jp/>

若

手ならではの農場づくりを
紹介したい、という話を編
集部からいただき、長野県東御市
にあるわが永井農場の取り組みを
綴っていくことになりました。第
1回目となる今回は、自己紹介も
兼ねて、農場の大まかなアウトラ
インからお話ししていきたいと思
います。

信州で生まれた僕は、酪農を営
む家族と一緒に、農業に触れて育
ちました。小さい頃から祖父や父

が働く姿を間近に見ていたし、何
より牛が大好きだったので、子供
の頃から牛飼いになることを決め
ていました。父の勧めもあり、高
校は北海道の酪農学園大学付属高
校に入学。以後、短大への進学も
含めて5年間を北海道で過ごしま
したが、僕の中ではこれが大きな
転機になりました。何しろ信州と
違って、学校のある江別市の隣に
は、大都市の札幌が控えています。
東京に負けないくらいファッショ

ンなどの情報が溢れていて、いつ
だって都会の生活を満喫できる。
ここでは田舎と都会、両方の暮ら
しを体感できたわけです。そのう
ちに「ものを作る人」とそれを
「消費する人」という構図が見える
ようにもなりました。
やがて二十歳で信州に戻り、家
業に入りました。僕にはいざれ牛
乳の加工品を商品化したいという
目標がありました。いきなり乳
製品を手がけるのは難しそうでし





永井農場の管理棟。消費者の目線を失わないよう、休憩室には各種雑誌が取り寄せられている。店もそう。

た。ちょうどその頃、コメの自主販売を実践する経営者の方々に会って刺激を受けていたこともあり、まずはコメでブランドを立ち上げてみることを決意しました。

まず真つ先に取り組んだのがパッケージデザインです。とりあえず袋に入れて売れば良いという発想ではなく、自分だったら、こんな袋に入ったものを店頭で選びたいとか、これなら買い続けたいというものを創ろうと思いました。

やはり学生時代に売り場をかなり見ていたからですかね。消費者の視点から見た商品イメージというのが、鮮明にありました。

信州に移住していた作家の玉村豊男さんに相談をもちかけ、地元デザイナーや印刷屋さんと一緒に勉強しながら、デザインイメージを積み上げていきました。僕がデザインにこだわるのは、農場のブランドをきちんと立ち上げていくには、デザインとの関連が切り離せないからなんです。CI（コーポレート・アイデンティティ）とかVI（ヴィジュアル・アイデンティティ）という言葉があるように、ロゴマークやカラーを見ただけで、企業イメージや理念が伝わる、そんな農場づくりをしようと思っていました。こんな片田舎

ですから、印刷屋の営業さんに「ロゴマーク創りたいんです」と頼んでも、最初は「え？でも永井さんって農家でしょ？」と驚かれたものですよ。その方とは今でもお付き合いがありますけど、そんなところからのスタートでした。そして結果的に、クラフト系のすっきりしたデザインのパッケージが完成したのです。

永 井農場ではこうした商品パッケージ同様、農場そのものの

デザインも大切にしています。僕が中学生の時に、父の手で新しい牛舎とサイロが建てられました。それから15年ほど経った1997年、今度は僕が管理棟を建てました。デザインのコンセプトは、ともに「欧米スタイルの酪農」です。

サイロが建ち、芝生が広がり、建物の色や樹木のレイアウトにもきちんと関連性がある。そして誇りになるような看板があり、素晴らしい牛たちがいるというイメージです。僕自身、学生時代にヨーロッパ各国を回ったり、米国でファームステイさせていただいたことがあるので、ステータスとプライドを伴う彼らの農場観には憧れていました。そんな想いが込められているだけに、父が建てた牛舎やサイロと、

僕が建てた管理棟は、時間的な差こそあれ、決してアンバランスになっ­て­い­ま­せ­ん。これからも施設を拡充していく予定ですが、時間が経っているものと新しいものが調和するような、統一感を大切にしたいと思っています。そうすればスタッフのモチベーションも上がりますし、訪れる人も楽しく、この農場で生産されるものを食べてみたいと思えるはずですよ。

こういう話をすると、よく「観光農園をしたのですか？」と聞かれますが、そんなつもりではありません。いわゆる観光客が物販でお金を落としていくようなスタイルではなく、あくまでも純粋に農業生産をする場所が素敵で、そこで訪問客がいろんなものを感じてくれれば良いと思っています。

僕らはこんな素敵な仕事をしているんですよ、こんな農業を目指しているんですよ、という意思表示なんですね。生産技術やコストの問題ももちろん大事ですが、生活の豊かさ、職場としての豊かさを農場から感じられることが、これからは非常に大事になっていくのではないのでしょうか。永井農場に若いスタッフが 많이のは、そういうものを感じとってくれたのではないかと思っています。